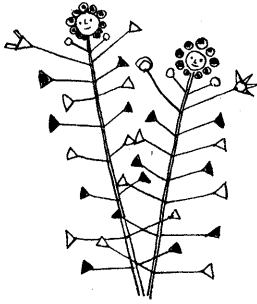


傲慢

庄籠しょうもり

道子



「そんなの傲慢じゃないですか？」

私は受話器に向かって叫んでいた。相手は娘の小学校の担任の先生。年輩の女性で、自分はベテランだという自信にあふれておられる。娘が学校を休むたびに電話がかかってくる。

そう、その日もかかってきた。

先生「あきさんに学校に来るよう言っして下さい。クラスの子もみんな待っています」

私「はあ。本人が行くと言うなら、いつでも送っていきますが」

先生「本人の意志も大事ですが、お母さんからも言っして下さい」

私「私が言っただけ聞かぬ子じゃありませんから」

先生「私が『学校において。約束やで』と言うと、

『うん』と言ってくれますよ」

私「そんなふうに言われたら、そう答へざるをえないんじゃないですか」

先生「あきさんも学校に来て、みんなといっしょに楽

しく過ごして欲しいんです」

私「本人が楽しいと思っただら自分から行くと思います
が」

先生「学校と家庭がともに手を取り合って子どものし
あわせのために協力していかないと……」

「子どものしあわせのために」その言葉を聞いたとた
ん、私の頭は爆発してしまった。子どものしあわせのた
めに、子どもを学校にやれと言う。子どものしあわせの
ために、学校に行けなくて苦しんでいる子どもを無理し
ても学校に行かせろと彼女は言う。

毎日毎日学校に行くこと、それが子どものしあわせ。
制服を着て、制帽を被って、白い靴に白いくつ下。先生
の言う事は疑問も持たずにうのみにし、言われた通りに
行動し、毎日きちんと宿題をする。それがあたり前、そ
れが子どものしあわせだと彼女たちは固く信じて疑いも
しない。

やめてくれ。もうこれ以上押しつけないでくれ。これ
以上、我が娘を苦しめないでくれ。

私「子どものしあわせ？ この子のためにはこうある
のがしあわせだなんて、そんなの、傲慢じゃないです
か？ この子のしあわせは親の私にもわかりません。子
どもは毎日学校に行つて勉強するもの、だなんて押しつ
けないで下さい！」

私は泣きながら叫んでしまった。

『登校拒否と子離れ』（本誌、第九十巻、第十二号）を
書いたのは娘が四年生の時だった。

赤ちゃんの時に脳腫瘍が発見されて手術を受けた娘
は、六歳になつてもまだひとりで歩くことができなかった。
でも校区の普通小学校に入学して喜んで通つた。三
年生の四月に引っ越しをして転校した。よろよろではあ
るが何とかひとりで行けるようになっていた。

転入した小学校は制服があり、ブラウスや靴・くつ下
の色・持ち物・宿題……決まりの多いところだった。娘
は一挙手一投足を周囲の子どもたちから見張られ注意を
受け続ける。娘は学校に行けなくなった。

四年生はほとんど登校しなかった。運動会も出なかった。プールが好きなので、プールの季節だけ少し通った。

五年生はけっこう行った。月に十日から十五日くらい行った。ひとりだけカラフルな私服を着て、ランドセルではなくリュックサックを背負って、二時間目とか三時間目とかから行った。五年生の担任が冒頭の電話の相手である。

六年生になって、娘はえらくがんばった。制服を着て、朝から毎日通った。私の送り迎えも断って、ひとりで歩いて通った。毎日がんばって通って、そして五月の末、チック症状を起こした。六月と七月は一日も行かなかった。もうこれで学校にも懲りたかと思うと、二学期になってまた通っている。行ったり休んだりしている。

五年生の担任の先生は「クラスのみんなが待っています」が口癖だった。「あきさんが来るのをみんな待っています。学校に来て下さい」と、いつもいつもいつも

おっしやった。

クラスメイトに日記のコピーをわざわざ届けて下さったこともあった。日記のコピーは二枚あった。

「またあきちゃんが学校にこなくなりました……教室のつくえといすが、一つぼつんとだれもすわってなかったら、みんなとつてもさびしい気持ちになります。だから一日でも早く学校に来て、みんなと楽しい学校生活を送ってほしいです。わたしからのお願い、あきちゃんにわかってほしいです」

「今日、あきちゃんが来ていませんでした。私はなんであきちゃんこうへん（来ない）のやろうと思いました。あきちゃん、ずる休みしたらあかんど思いました。ずる休みじゃなくても休んだらあかなあ……あきちゃん、だから、がんばって学校へ来てね。明日たのしみにまってるからね。ぜったいぜったいに学校にきてね。みんなまってるから」

三重丸がついていて「そうね。ぜったいに来てほしいね。待ってるものね」と先生の字が添えてあった。

待ってるから来いと彼らは言う。こんなに待ってやっ
てるのになんで来ないのだと。まるでおどされてるみた
い。

教室の机が一つ空いているのが寂しい。そうかもしれ
ない。みんなが喜んで学校に行つて楽しく過ごすなら、
それは素敵なことだろう。でも、学校に行きたくない子
がいる。学校に行くのがつらい子がいる。学校に行かな
い人生を選ぼうとする子がいる。いろんな生き方があつ
ていいじゃないか。

娘の人生は娘のものだ。クラスメイトや先生がいくら
待っているからといって、無理して学校に行かなくてい
い。

それにしても不思議でたまらない。四年生の時、ほと
んど学校に行かなかつた娘に何も言わなかつたクラスメ
イトが、その同じ子どもたちが、担任が変わつたとたん
「待ってる、来てね」を連発し始めた。日記に書き始め
た。何がこの先生にうけるのか、何を言えばほめてもら
えるのか、子どもたちはこんなにも敏感なんだ。

学校は恐ろしい所だ。私は自分自身が登校拒否状態に
なっていることに気付いた。できる限り学校には近付き
たくない。

授業参観日。娘が学校に行つてない日なら当然私も行
かない。娘が登校して、来て欲しいと言う日は行つてや
ろう。行きたくなくて朝からゆううつだ。やっとの思い
で行く。親しいお母さん方もいない。しょっちゅう学校
を休む、たまに来る時は私服、そもそも障害児のくせに
普通学校に行つて周囲に迷惑をかける、そんな子の親と
はどうつき合つてよいかわからない。そんなふうに思わ
れているような気がする。

四十五分の授業の間、教室の後ろにじっと黙つて立つ
て耐え、授業が終わると逃げるように帰つてきてしま
う。

こんな私も最初は学校を変えようと思った。私自身は
学校大好き少女だった。娘の存在が学校をより楽しい場

所にするだろうと思つて普通学級を希望した。同じ人間なのだ。前の小学校でうまくいったのだから今度の小学校でもきつとうまくいく。こちらが誠意を持って対すれば、むこうも温かく受け入れて下さるだろう。お友達というものが大好きで、本当は学校に行きたいのに行けなくなった娘のために、私はできるだけのことをしようと思つた。

担任の先生と話し合つた。校長先生や教頭先生とも話し合いの場を持った。学級懇談会でも他のお母さんやお父さん方に相談を持ちかけた。

娘について行つて教室の後ろで一日を過ごしたこともあつた。学校の会議室で待機していた日もあつた。

三年生の担任の先生は「学校は集団生活ですから協調性を持ってもらわないと」とおっしゃつた。四年生の先生は「算数の九九が言えなくては人間的にしあわせな暮らしはできません」とおっしゃつた（娘は九九が言えない）。五年生の先生は情の深い方で娘のことをかわいいと思つて下さっているようだったが、その押しつけの強

さに私は窒息しそうになつた。六年生の担任は、学校に行きたくない・学校がこわい、そんな気持ちは自分には全くわからないとおっしゃつた。

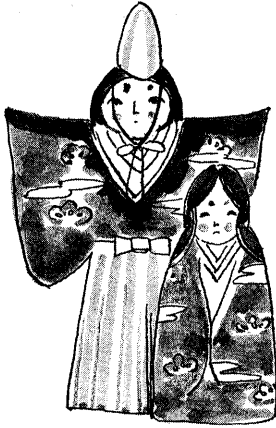
登校拒否を考へる会というのを見つけて毎月行つたこともあつた。登校拒否について書かれた本も何冊か読んだ。隣街の自主保育の会に毎週参加したこともあつた。

私は私が産んで育ててきた私の娘のためにできる限りのことをしてやろうと思つた。生後八か月で脳腫瘍の手術を受け、首がぐらぐらになり、笑うことも泣くことも、哺乳瓶を吸うことすらできなくなった娘の前に、私は誓つたのだ。たとえこの子がこのまま一生寝たきりの状態であろうとも、私はこの子をしあわせにしてみせると。そして私にはそうできる自信があつた。

だが、今、泣いたり笑つたりはもろろん、しゃべり、字を書き、ひとりでトイレにも行き、歩いて学校にも行くことができる娘が、私の目の前で苦しんでいる。お友達か欲しいのにできなくて、学校に行きたいのに行けなくて苦しんでいる。その娘の苦しみを私は取り除いてや

ることができない。

特殊学級や養護学校に転校することも考えたが、娘が拒否した。自主保育の会は私たち母娘を温かく受け入れてくれたが、幼い子どもたちとお母さんたちの穏やかな



空間を娘はひっかき回し困らせ続けた。

学校について行っても何もしてやることができない。家においてもつき合うことができずにつき離してしまつた。他所に連れ歩いて疲れ果てるばかり。以前住んでいた所へ戻って元の学校に行けるようにしてやればいいのかもしいれないけれど、できなかった。やっと手に入れたお寺の暮らしを夫は捨てたくなかつたし、私も夫と離れて暮らす勇気がなかつた。

私はこの子のために何一つしてやれない。私が良かれと思つてやることはよけいなことばかりで、娘を苦しめるばかりだつた。

たとえ寝たきりの状態でもしあわせにしてみせると誓つた私が、こんなにいろんなことができる状態の娘をしあわせにしてやることができない。私は自分の無力さに打ちのめされた。

私の大好きな歌手さだまさしさんの歌に『奇跡、大きな愛のように』というのがある。その中で彼はこう

歌っている。

僕は神様でないから

本当の愛は多分知らない

けれどあなたを想う心なら

神様に負けない

この「神様」は、この世のすべてを造り出した力・宇宙や大自然の生命体・生命の源、浄土真宗で言うあみだ仏（私の夫は浄土真宗の僧侶なので）のことだろうと私は解釈している。そんな、とてつもなく大きな力よりも自分の愛はすごいんだぞ。誰にも負けないほど愛してるんだぞ。そういう歌だと私はずっと思ってきた。私自身も娘や夫をそんなふうに愛していると思ってきた。夫への愛はひょっとしたら変わるかもしれないけれど、娘は、私が産んで育てた、たったひとりの娘への愛は誰にも負けない。そう信じて疑いもなかった。

だけど、このごろ、違うなと思う。人間の知恵などと

うてい大刀打ちできない大いなる力の前に、私の愛なんかほんの小さなものだった。そもそも、私が産んだ娘だと言うけれど、あの陣痛すら私が起こしたものじゃなかったじゃないか。私は娘のために何をしてきたか。何をなし得るか。娘のためになることなど何一つできない。娘のために良い事をしたつもりが、実は苦しめるばかりじゃないのか。

そうだ。家において荒れる娘とつき合うのに疲れ果てた私は娘をつき離してしまったじゃないか。私が放り出すことでこの子が首をくくって死んでも私は知らない。そう、私は我が子を見捨てたのだ。私の愛なんてしょせんそんなものだったんだ。

私がどんなに娘を愛しているつもりでも、その愛は、仏様にも神様にもとてまかなわれないんだ。それに気付いた時、娘の生命のすぐ後ろに宇宙を見たような気がして、深く頭を下げた。

もう一度『奇跡、大きな愛のように』を聞いてみた。さだまさしさんは「本当の愛は多分知らない」「大

きな愛になりたい」と歌っている。そうだ。自分の愛が神様にとてもかかないっこないことをさだましささんは知っているのだ。だけどその上で、神様に負けないくらい人を愛したいという人間の純粋な気持ちを歌いたかたに違いない。

私はなんて傲慢だったのだろう。もちろん今までだって、子どもは自分の所有物じゃないと思っていた。別の人生だ、子どもの意志を大切にと思っていた。なのにこんなに傲慢だった。

そしておそらく、まだまだ鼻持ちならないほど傲慢なのだろうと思う。これからも何度も何度も思い知らされなければならぬのだろう。

引越す前、娘が喜んで学校に通い、いろんなことがうまくいっていた頃、私は思っていた。子育てなんて簡単よ。ポイントさえ押さえればいい子に育つのよ。私は有頂天だった。さぞや周囲の人々を傷つけていたことだろう。

自由な空間をめざして個人が開いておられるフリースクールに、娘は通い始めた。今は週一日通っている。中学生になったら毎日通うのだと言う。あんなに「ママ、ママ」と私をひっぱり回していた娘が「ママはついて来るな」と言う。電車を乗り継いで一時間半かかる。今は途中まで送り迎えしている。だんだん独りで行くのだと言う。

ずいぶん周囲をひっかき回して困らせているようである。どんなふうに周囲とかかわって成長していくのか。困らせ続けて追い出されるのか、うまく折り合いをつけてゆくのか。私はハラハラしつつ見守りたいと思っている。

(はるにれの会)